

日本英語教育史学会 会報

271

2015 年 10 月 20 日

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番

東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室

tel: 03-5284-5641 fax: 03-5284-5699

e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

学会公式ウェブサイト: www.hiset.jp

第254回研究例会報告

2015 (平成 27) 年 9 月 27 日 (日), 県立広島大学のサテライトキャンパスひろしま (広島市中区大手町) において, 第 254 回研究例会が開催されました。参加者は 18 名でした。

はじめに第 3 回英語教育史入門セミナーが行われ, 馬本勉氏 (県立広島大) が「明治時代の教科書ガイド: 独案内研究の面白さ」というテーマでお話しされました。続いて「資料紹介」として安部規子氏 (久留米工業高等専門学校) による「広島高等師範学校教授・杉森此馬のイギリス留学: 明治 37 年の日記から」の発表, 最後に, 藤本文昭氏 (横浜翠陵中学・高等学校) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として江利川春雄氏 (和歌山大) による「英語教育と戦争教材: 江利川春雄著『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』を素材に」の発表が行われました。司会は馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は馬本氏, ②は安部氏, ③は江利川氏及び藤本氏の発表への感想です)。



◆題材や人物等に焦点を当てた調査研究は大変興味深かったです。最後に話題になった題材論については, 中学校教科書編集の際にも非常に論議を重ねたので納得しながら話を聞くことができました。今日ご発表された 3 人の先生方から学んだことを明日からの授業に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。 <胡子美由紀>

◆過去の先達の学習を知ることによって, 今までの自分の考えが先入観だということに気づき, 目からうろこが落ちました。とても奥の深い教育を先生も生徒もしていたんだと思いました。自分自身, 勉強不足だと感じました。 <YT>

◆題材論を切り口に分析をなされているのが筋が通っていておもしろく拝聴させていただきました。少し疑問だったのが題材論を超えて, 如何に質問がなされているのかということも研究対象にしてもよいのではないかと思います。その中にある求める生徒像のようなものを浮き彫りにすることはできるのではないかと感じました。今後も研究会に参加できるときはさせていただきます。よろしく願いいたします。 <石井達也>

◆研究例会に参加するたびに発表者の先生方の熱心な研究の姿に感動します。いつも勉強させていただき有り難く思っています。

英語教育史入門セミナー (第 3 回)

明治時代の教科書ガイド：独案内研究の面白さ

馬本 勉 (県立広島大学)

10 数年前、庄原市の大学に赴任した翌年のことです。他県の古書店で求めた『正則ニューナショナル第二リード独案内』の訳著者・森 修一は、庄原出身の人でした。調べを進めると、庄原英学校の未知の部分が少しずつ明らかになっていきます。この不思議な出会いは、私の英語教育史研究の大きな転機となりました。「独案内」は明治期の教科書ガイド。発音や訳など、学習者が知りたいことが詰まっています。漢学、蘭学同様、訓読式で学ぶ英学の手引書として、漢文調の「直訳」（という書物）とともに広く用いられました。明治期後半になると、徐々に「講義」と呼ばれる、現代の英文解釈参考書のような学習書が現れ始めます。単語の訳順を表す数字が姿を消し、構文や句に注を与えてパッセージ毎に訳すことが多くなります。訳文自体もこなれた日本語へと変わり、関係代名詞を先行詞とともに「ものそれは、～ところのもの」と二度訳す、漢文で言う再読文字は姿を消していきます。こうした具体的な訳の変化を分析するところから、訳読法の変遷を解明し、現代の英語教育へのヒントを探っていきたいと思います。貴重なコメントをいただいたフロアの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



馬本先生の「独案内」は、勿論、日本語による解説書ですが、電子工学装置の無かった当時、学生たちが独りで頑張って、どの程度の学生が容易にこれを理解することができたでしょうか。英語に対する相当の興味・関心・動機付けがなければじっくりと読め、発音を習得できなかったのではと想像しますが、どの程度習得できたのでしょうか。

安部先生の講演を聴いて、昔、広島大学の先生や A.C.Gimson 先生から H. Sweet や D. Jones の業績について学んだことを思い出し懐かしく思いました。

江利川先生のテーマ<戦争>は今日、最も印象的なものです。多くの教科書の中から特定の題材を選択して、何がどのようにどの程度、理解可能に配列も多難。それを計量化するには、題材の濃度、範囲、深度をいかに扱うか、など問題も多い。藤本先生の資料を加

えて、今後も教員養成における教材研究と教材の貴重な資料としたいと思っています。

<三浦省五>

◆①馬本先生の発表は、訳の英語教育における位置価値を再考するという点からも大変興味深かった。独案内の現代における活用も、アクティブラーニングと関連があると思う。気になったのは、当時の書き下し訳、直訳、意識がそれぞれどのように活用されたかという点である。字義理解、内容理解など、授業目的に応じて使い分けたのだろうか。

<守田智裕>

◆①明治期の生徒と教師(?)双方に幸せをもたらした「独案内」の全貌が理解できたとても為になるセミナーでした。「独案内」→「直訳」→「講義」という流れがあることを初めて知りました。「独案内」の基本的な構成が今日の「教科書ガイド」まで連綿と受け継がれていることもサプライズでした。先生の次回

<発表を終えて>

安部 規子 (久留米工業高等専門学校)

今回は、広島高等師範学校教授・杉森此馬の明治 37 年の英国留学中の日記を中心に、履歴書や辞令などの資料も含めて紹介する機会をいただきありがとうございました。日記は最初は日本語で、2 月からは英語で書かれ、天気や気温、手紙の送受信も几帳面に記入され、その人柄をしのばせています。また、日本では高名な英語教育者であり、また音声学における功績が特に注目される杉森ですが、オックスフォード大学ではヘンリー・スウィートに加え、文学の講義も欠かさず聴講しており、シェークスピアやチャーサーなどのイギリス文学への深い関心を感じ取ることができました。その他、当時の英国の風物や人々の生活、同年勃発した日露戦争の戦況、同時期に英国に留学していた日本人との関係など、異なる視点から多くの情報を提供していると思われます。これらの資料は 100 年以上にわたって遺族により大切に保管されてきましたが、今年の 3 月に出身地である福岡県柳川市の柳川古文書館に寄贈されました。今回の紹介が、これらの資料がより多くの研究者や郷土の皆さまに活用されていくきっかけになれば幸いです。



のセミナーが待ち遠しくなりました。

<もみじまんじゅう>

◆①馬本先生の豊富に集められた「独案内」の例から、どのように日本人が英文を理解しようとしてきたかがよく分かりました。その流れの中から日本人独自の英文解釈法が出てきたのだと納得しました。私も高校時代山崎貞の「新々英文解釈研究を」のお世話になりましたが、私の英文理解の基礎になったと思っています。

<JH4DGW>

◆①英語教育史入門セミナーとして若い人たちに対する英語教育史研究への誘いという役割とともに、これまでのご研究のまとめとも言うべきご発表として伺いました。これまではいろいろと出された独案内をどれも大同小異の参考書と思っておりましたが、独案内から直訳、講義へと発展していく過程を具体的な資料に基づいてお示しいただき、これはむしろ小同大異の、手に負えない代物との感を強くしました。この種のを全点完全に集めるのは困難かと思いますが、ぜひ収集と分析

を続けていただいて、研究成果をおまとめいただければと願っております。 <Dragon>

◆①積年の努力で独案内研究の輪郭がはっきりしてきたと思います。明治 20 年前後に独案内の発行が突出していた事実の裏に何があったのか。たとえば明治 19 年の中学校令で各県 1 校主義が徹底し、多くの若者が中等教育=英語教育から排除されたことが独学熱を招いたのではないか。そんな仮説を、当時の通信教育の流行と合わせて考えると、見えてくるものがあるのではないかと思います。論文化が楽しみです。

<みかん舟>

◆②丹念に日記を書き起こされ、我々に読みやすくして提供され、ありがとうございました。当時の留学者の様子が窺われ、興味深くお聞きしました。

<JH4DGW>

◆②一人の人物の経歴の調査という面白い発表だった。できれば、夏目や森のような比較対象と合わせて、(あるいはその知識を自分をもって) また資料を読みたい。

<守田智裕>

<発表を終えて>

江利川 春雄 (和歌山大学)

研究例会で拙著『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』(研究社, 2015)を取り上げて下さったこと、また、英語教科書の戦争/平和教材の研究では第一人者であられる藤本文昭先生に指定討論者になっていただいたことに、心から感謝申し上げます。

藤本先生からのご指摘にもありましたが、拙著では<戦争>教材の登場割合を計量的に提示できませんでした。厳密に軽量化するためには、すべての教科書を精査しなければなりません、現時点で集め得た約 3000 冊では、まだ全体の 6 割程度しかカバーできないと思います。生徒が手にした教科書の「供給本」は公共図書館等にはほとんど所蔵されていませんので、会員の協力も得ながら、引き続き収集に努め、全容の把握に努めたいと思います。

フロアの大学生から「どんな題材が記憶に残るのか」といった新鮮な問題提起をいただきました。教科書の視点からではなく、学習者の視点からの題材論研究の可能性を秘めています。

今回は紙幅と時間的な制約から、戦前の教科書における<戦争>教材の歴史にとどめました。戦後の教材を含めた通史の完成は、藤本先生をはじめ、ぜひ次世代に夢を託したいと思います。ありがとうございました。



◆②貴重な杉森此馬の英国留学時の日記を翻字してご提供いただきましたが、その作業は大変だったと思います。浅田栄次の日記や、細江逸記の滞英日記も活字翻刻して公刊されていますので、ぜひ、和文の部分も含めて、公刊をお考えください。ただ、現在では個人情報の問題がありますので、関係者とじゅうぶんに協議いただくことが必要かと思えます。なお、今回のようなご発表においては、判読不能ということで空白とした箇所については、併せて当該箇所のコピーを添えていただくと、参加者から答やヒントが得られて作業の進捗につながるかと思えます。

<Dragon>

◆②新資料の発掘・分析を通じて、広島ゆかりの英語教師像を次々と明らかにされる安部先生の御研究を大変興味深くうかがいました。復刻は大変だったと思いますが、実は楽しい作業であったことと拝察いたします。続編を楽しみにしております。

<Horse>

◆②優れた研究者は資料への嗅覚が鋭く、ときに資料の方が研究者に寄っていきます。安部先生のご発表を拝聴すると、いつもそんな思いが湧いてきます。今回のような基礎資料を丹念に発掘・分析し、全体史の方向につなげていく。英語教育史研究の原点を学んだ気がしました。

<みかん舟>

◆②杉森此馬のオックスフォード滞在中の日記の書き起こしは手間暇のかかる苦しい作業だったと思います。配布資料を拝見して彼の生活が手に取るように分かりました。とても「規則正しい」生活を送った人物だったのですね。昔、在外研究員としてロンドンに滞在していた時に訪れたことのある地名や施設名がかなりあり懐かしかったです。杉森は「パブ」には出入りしなかったのかしら。

<もみじまんじゅう>

＜発表を終えて＞

藤本 文昭 (横浜翠陵中学・高等学校)

『英語教科書は〈戦争〉をどう教えてきたか』についての感想を指定討論者として戦後の高校英語教科書(リーダー)の戦争・平和に関する題材を研究してきた立場から、述べさせて頂きました。

戦争に若者を駆り立てた英語教科書題材。その具体例がご著書には多数紹介されています。人種間の争いを不可避とみなし、〈戦争〉教材を求める「民意」が、そのような題材を増殖させる原動力であったことを江利川先生はご著書の冒頭で述べられています。また為政者にとって不都合な題材を排除しようとする動きが、1988年にも起こり、それが英語教育界全体の問題として総括されず放置されてきた事実



が最終章で紹介されています。いつか来た道を私たちは、無意識で辿っているのでしょうか。過去の〈戦争〉教材の歴史を検証しながら考え、行動しようという江利川先生の提起に次世代を育てる私たち英語教師はどう応えたらよいのか。皮相的な回答で終わらせてはいけない、読了後そんな決意を固くさせる名著です。

◆③ (江利川先生へ) ご労作の執筆過程がともよくわかるお話をうかがうことができました。気の遠くなるような一次資料の収集に加えて、章立てにも慎重な配慮がなされた「絶品」の完成、本当にご苦労様でした。〈戦争〉教材をめぐる「計量的な分析」の話が出ましたが、私はミリタリストティックな題材が日露戦争後と日中戦争後に増加したというご報告で十分と思いました。「計量的な分析」の方向性が見いだせないからです。

(藤本先生へ) 指定討論者としての責務を十二分に果たされたと感じました。本書の入念な読み込みに基づくコメント、平成27年度高等学校外国語科英語教科書の詳細な題材調査報告、いずれも大いに勉強させていただきました。くもみじまんじゅう>

◆③とても示唆に富んだ発表だった。日本の戦後の〈戦争〉の扱われ方は自分も興味がある。特に、「加害者」としての側面と「被害者」としての側面についてどのように日本は描かれたのだろう。中学現行教科書は、「被害者」の面が多い(Sunshineの『かわいそ

うなゾウ』や Horizon の A Mother's Lullaby など) 印象がある。 <守田智裕>

◆③最近の政治を中心とした社会情勢には危惧を抱いていますが、過去の英語教育も戦争推進の一翼を担ったことがよく分かりました。とにかく昨今の潮流はコミュニケーションばやりですが、江利川先生が言われたように、人間教育としての英語教育の必要性を改めて強く感じるとともに、英語教育史研究を通してこそ現在の英語教育を考えることができることを再確認できました。 <JH4DGW>

◆③戦後70年のこの機を逃してはならぬと短期間に精魂を込めてまとめられたという江利川先生のお話をうかがい、また、この度の指定討論者を引き受けられて3度読み返された藤本先生の論評をうかがって、これまでの同種企画のうちで最も歯車の噛み合った「自著を語る」のセッションであったと思います。「葦編三絶」とはまさにこのことで、ふだん斜め読みで済ませることの多い自分を省みるよい機会となりました。 <Dragon>

》 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内が遅れがちになり申し訳ありません。順次お届けいたしますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

なお、ご不明の点は、お手数ですが事務局（会計担当）までお問い合わせくださいますようお願いいたします。

問い合わせ先 事務局（会計担当）河村和也
電子メール：membership@hiset.jp 携帯電話：090-3437-1703

》 『日本英語教育史研究』 第 31 号 投稿締切迫る

研究紀要『日本英語教育史研究』第 31 号への投稿締切が近づいてまいりました。締切は 10 月 31 日（土）〔必着〕ですので、投稿をご予定の方はご注意ください。

送付先：〒331-0825 埼玉県さいたま市北区榎引町 2-176-4 佐藤 恵一

》 論文投稿の前にご確認を

学会誌『日本英語教育史研究』に論文の投稿を予定されているみなさまにお願いいたします。会報 270 号掲載の「投稿規程」および「投稿論文標準書式」に基づいて原稿を準備されていることと思いますが、特に以下の点にご留意ください。

◎ 完成ページで 20 ページ以内が原則です

すでにお知らせの通り、「標準書式」では文字の大きさ・1 ページの行数・1 行の文字数・使用フォント・句読点の打ち方なども詳しく定めてあります。今一度ご確認ください。

なお、最初のページは、(1) 論文題目、(2) 論文題目の英訳または和訳、(3) 執筆者名とそのローマ字表記[例 ERIKAWA, Haruo]、(4) 日本語または英語のキーワード 3 語、(5) 100～150 語の英文アブストラクト、(6) 本文の順となりますので、漏れのないようご注意ください。

◎ コピーと受領確認用の葉書をお忘れなく

著者名が必要なのは正本 1 部のみです。副本には著者名が入らぬよう、プリントアウトもしくはコピーの際にご配慮ください。

また、提出原稿にはページを付していただきます。手書きでもかまいませんので、お忘れなくお願いいたします。

◎ インターネット上での公開が前提となります

現在、J-STAGE で公開されているのは第 23 号までに掲載された論考ですが、今後その範囲は拡大される可能性があります。インターネット上で論文が公開されることについては、投稿の段階でご承諾いただいていることとなりますので、くれぐれもご注意ください。

>> 英語教育史フォルダー

- ◆武市一成『松本亨と「英語で考える」：ラジオ英語会話と戦後民主主義』彩流社，3780 円

>> 2015 年度 研究例会の予定

研究例会は 5 月を除く奇数月の「第 3 日曜日」に開催します。

- ◆第 255 回研究例会 2015 年 11 月 15 日 (日) 東京都で開催予定
→本号 pp.7-8 に詳報
- ◆第 256 回研究例会 2016 年 1 月 10 日 (日) 東京都で開催予定
→詳細はウェブサイト，ならびに「日本英語教育史学会会報」272 号にてお知らせします。
- ◆第 257 回研究例会 2016 年 3 月 20 日 (日) 大阪市で開催予定

研究例会での発表希望者は，(1) 発表希望月，(2) タイトル，(3) 発表概要(100～200 字程度)，(4) 使用予定機器，以上の 4 点を明記の上，発表希望月の前々月 10 日 (1 月発表希望であれば 11 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

EDITOR'S BOX 秋田は朝晩の寒さが厳しくなってきました。灯油の販売も始まり，だんだん冬が近づいているのを感じます。まだみなさまお住まいの地域はそれほど寒くはないかもしれませんが，どうかご自愛下さいませよう (若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)

第 255 回 研究例会のご案内

日 時：2015 年 11 月 15 日 (日) 午後 2 時～
 会 場：東京電機大学 東京千住キャンパス (東京都足立区千住旭町 5 番)
 1 号館 10224 室 [1224 セミナー室]
 参加費：無料
 問合せ先：東京電機大学 工学部 英語系列 河村研究室 (河村和也)
 メール：reikai@hiset.jp 電 話：03-5284-5641

◆研究例会はどなたでもご参加いただけます (予約不要)。

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

英語教育史入門セミナー (第 4 回)

「日本英語音声教育史への誘い：日本人は英語音声教育にどう取り入れてきたのか」

田邊 祐司 氏 (専修大学)

【概要】今回の講座では，英語教育史の各分野の中でも十分な光があてられてきたとは言えない音声研究・指導領域を取り上げます。なぜ，わたしは音声に"はまって"しまったのか，どんなスタン

スで、何を読み、どのような方法論を採り、何を収集してきたのかという最初の一步から講座をはじめます。次に英語音声の研究、教室への導入に関して、これまでわかったことの"ビッグ・ピクチャ"を提示します。最後に、「グローバル化」が謳われる新指導要領の公表を前にして、"4 技能統合型", "Active Learning", さらに"Flipped Learning"など、次の約 10 年を彩るであろう指導理念と音声指導の中味をいかに摺り合わせるのか、そこに歴史の研究がどう役立つのかについてもふれ、若い方々に託したいことを伝えたいと思います。

自著を語る

「学習英文法における逆欠如現象：川嶋正士著

『「5 文型」論考—Parallel Grammar Series, Part II の検証』を素材に」

提案者：川嶋正士氏（日本大学）

指定討論者：小田勝巳氏（工学院大学）

【概要】日本で幕末に本格的に英学が始まって以来、英語教育においても多くが導入されてきた。その中で我が国で知らぬ者がいないほど広まった「5 文型」は祖型が提唱された英国をはじめ、海外の英語教育においてまったくと言ってよいほど認知されていない。何が原因でこの「逆欠如」現象が起きたのか、拙著「5 文型論考」を素材に祖型誕生の背景から見られる問題を英文法史のみならず英国における教育史の巨視的な視点から考察したい。

【会場案内】（東京電機大学ウェブサイトより）

会場となる教室は 7 月例会時と異なります。入館に際しては正面入口をご利用ください。



【交通案内】JR 常磐線・東武スカイツリーライン・地下鉄日比谷線・地下鉄千代田線「北千住駅」東口（電大口）下車徒歩 1 分